

國學院大學學術情報リポジトリ

祭祀考古学における研究手法の開発：
クロス・コンテクスチュアル分析法と多重スケール
分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 大 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001994

祭祀考古学における研究手法の開発

—クロス・コンテクスチュアル分析法と多重スケール分析—

中村 大

要旨

祭祀考古学では、考古資料の集積を通じたボトム・アップ的な研究とともに、どのような視点でそれを解釈するのかというトップ・ダウン的な研究手法の開発が重要課題である。本稿ではその一つとしてこれまで提案してきたクロス・コンテクスチュアル分析法 (Cross Contextual Analysis, CCA) の、「部分 (祭祀) はそれが含まれる全体 (社会) と相互作用環を形成している」という仮説の理論的根拠として人類学モデル・エージェンシー論・解釈学的モデルを提示する。それとともに、CCAにはスケール概念を意識した多重 (マルチ) スケール分析が必要であること論じる。空間・時間・形態にスケール概念を導入しそれぞれに3つの空間スケール (ミクロ, メゾ, マクロ) を区別しつつ、それらを重ね合わせながら祭祀の社会的意味を考察する方法を探る。ケーススタディでは祭祀遺物の空間情報 (分布状況) を扱い、精神文化に関わる研究においても地理情報システム (GIS) による空間分析が活用できることを示す。

キーワード

クロス・コンテクスチュアル分析法 (CCA)、スケール概念、多重 (マルチ) スケール分析、GIS、地理クラスター抽出

1. クロス・コンテクスチュアル分析法 (CCA)

1.1. 分析の基本方針

CCAは、「部分 (祭祀) はそれが含まれる全体 (社会) と相互作用環を形成している」という仮説を前提としており、その両者およびそれら相互の関係性に対する理解を深めていくことで、祭祀に関わる個々の考古資料 (遺構・遺物) の要素の社会的・文化的な意味に対する解釈の妥当性を高めることを目的としている。文化を要素ごとに個別解釈していきこうとするのではなく、文化を構成する要素の連動性を明らかにし、総合的に理解していくことで、それらの連動性を明らかにしつつ総合的に理解していくことを目指す⁽¹⁾。

祭祀あるいは祭祀的景観の社会的な意味を解釈しようとするとき、各地域社会におけるコンテキスト (Context: 脈絡、状況) を考慮に入れる必要があり、CCAは様々なコンテキストの重ね合わせから祭祀遺構・遺物の多様な意味を類推することを試みる。谷口康浩が集落の景観考古学で挙げた生態・社会・イデオロギーがここでも基本的な3つのコンテキストとなる⁽²⁾。祭祀に集落・生業・交易・社会組織・集団関係に関する各種データを重ね合わせ、各要素に生じた諸変化の相互関係や連動性に注目し、祭祀遺跡・遺物が使用された当時の経済・社会組織・象

徴体系や集団関係などの状況と、それらが社会のいかなる変化と連動しているのかその関係性の解明を通じ、部分と全体の双方を視野に入れ、部分と全体の間を往来し、祭祀と社会の双方に対する理解を深めていこうとするのである。

1.2. 仮説と理論・モデル

クロス・コンテクスチュアル分析法の基盤となる理論やモデルは以下の3つである。

(1) 人類学における祭祀の一般モデル: 祭祀と物質文化の関係性

ムーアとマイヤーホフが列挙する儀礼の一般的特徴のなかでも、儀礼は参加者に象徴とメッセージを提示し、そのために文化のイデオロギーや範型、メタファーを一時的に目にみえるものに顕在化させる、という指摘は、祭祀に使われる道具類 (物質文化) の基本的性質を考えるうえで重要である⁽³⁾。これは縄文時代の祭祀にも当てはまるだろう。顕在化の方法には二つある。一つは土、石、木、金属などに表現するという物質化 (実体化)、もう一つは形式的行動のような非物質的手段に訴える方法である。石棒や土偶など縄文時代の祭祀遺物は、イデオロギーや象徴観念が物質化された結果であり、実体化はイメージや意味を共有し再確認する契機である。なお、

物質化には、視覚的に表現することで個人間におけるイメージの差異・揺らぎを縮約し、一定の型に収れんさせる効果もある。

祭祀を文化資源の一つであると見なせば、資源人類学が指摘する資源の性質もまた、祭祀の持つ一般的特徴を端的に示している。その内容を祭祀に移し替えれば、次のようになろう。周囲の環境のなかにあるものが祭祀活動に利用可能かどうか、つまり祭祀資源として評価されるかどうかは、その社会あるいは個人の欲求と利用能力という人間側の評価によって決定される⁽⁴⁾。つまり、祭祀道具を作成する際の素材の選択やその形状に込める意味付けは主観的である。また、そうした人間の欲求と能力は社会や文化によって異なる、歴史的な要素であるという相対性も持ちあわせている。そしてそれらの製作が個人の手によるものであっても、作り出された物質文化は社会的に構造化されたモノなのである⁽⁵⁾。

祭祀遺物はイデオロギーの視覚的表現であることとともに、その具体的形態は複数の社会過程を通じて形成されてくる。背後に社会関係を背負っているからこそ、ムーアとマイヤーホフが儀礼の一般的特徴として挙げた、儀礼（祭祀）は社会関係に影響を与え、コミュニケーションのさまざまな次元で参加者の社会的役割、アイデンティティ、集合的感覚に効果を及ぼすという役割を全うできる。

(2) エージェンシー論：ココロの役割

物質文化と社会を仲介するのが人間であり、エージェンシー（agency）は、社会的行動に参画するための意識的・無意識的な心理過程（ココロ）である⁽⁶⁾。エージェンシーが有する重要な2つの基本的性質がある。第1に、エージェンシーは開放系（open system）である。社会の各方面の活動からもたらされる情報がエージェンシーに蓄積され、行為の具体的内容を定める際の意思決定の一部となる。つまり、人間・集団が何らかの活動を行なうとき、その動機となるエージェンシーに彼・彼らの意図・目的・観念体系などのほか、生活における多方面にわたる行為を通じて様々な要因（経験・慣習、他の行動との関係、他者への配慮など）が入り込む可能性がある。祭祀活動には多項目が絡みあう複雑な意識過程がある。第2に、エージェンシーはモノや周囲の空間と相互作用的關係（feedback loops）を有する。

エージェンシーがモノや景観を作り出す（ココロからモノへ）一方で、作り出されたモノや景観が逆に人々の意識を変化させるのである（モノからココロへ）。

(3) 解釈学の理論：部分と全体

CCAは解釈学の基本的理論であり方法でもある「解釈学的循環（hermeneutic circle）」を採用する⁽⁷⁾。これは、部分と全体は相互依存的であり、部分は全体から、全体は部分から、相互に検討を重ねながら明らかにされていくべきであるという考え方である。この両面を理解するという目的設定に必要な前提が、「解釈学的循環」を受け入れることである。このように考えるならば、祭祀に関する道具、景観を理解するためには当時の社会的状況を考慮に入れながら理解する必要がある、という方法論に関する示唆を導き出すことができる。

1.3. 小結：CCAの理論仮説

人類学的モデルからは、「祭祀に関わるさまざまな文物は、その形成に関わる社会的諸関係が物質化された結果である」という仮説を設定できる。エージェンシー論からは、「社会の諸要素は完全に独立した存在ではなく、エージェンシーを介して、相互に影響を及ぼし合う関係にある」ことが指摘でき、祭祀という一要素が社会の他の要素群と何らかの関係性を有しているという仮定が導き出される。また、解釈学的循環に示される部分と全体の関係性から、2つの研究の方向性を統合することが必要である。つまり、全体は部分からという方向性は、ボトムアップ的な、部分は全体からという方向性は、トップダウン的な研究の必要性を示す。それらの相互チェックが繰り返され、円というよりはスパイラルのイメージで解釈が更新されていく。

以上の検討に基づき、「祭祀に関わる個々の考古資料（遺構・遺物）の要素の社会的意味を解釈の妥当性を高めるために、文化を構成する要素の連動性を明らかにし、総合的に理解していく」という分析方針を決定することができる。

3. 分析手法：マルチスケールのCCA

3.1. スケールの定義

スケールとは、空間や時間などの尺度や広がり

指示する概念である。地理学ではスケールの重要性が繰り返し強調され、欧米の景観考古学でも研究に際して考慮すべき問題とされている⁽⁸⁾。スケールの基本概念をまとめると以下のとおりである。

第一に、スケールには異なるカテゴリーがある。多くの学問分野では空間・時間のスケールが扱われるが、考古学では研究対象もまたスケール性を有している。遺構や遺物などの形態にも異なるレベルのスケール性が潜んでいる。また考古学の場合、空間スケールは分布論、時間スケールは編年論、形態スケールは型式論と密接に関わる。

第二に、空間・時間・形態は異なる広がり(スケール)を併せ持つマルチスケール性を有しており、便宜的にミクロ、メゾ(中間)、マクロなどの階層性を区別することが可能である。考古学が分析対象とする遺構や遺物もマルチスケールのである。縄文土器を例にとれば、深鉢という全体の形状は同じでも、胴部文様の相違に注目すれば異なる型式に分類する時もある。考古資料の形態スケールは形態の類似度(あるいは相違度)ということができる。

第三に、スケールに絶対的な境界は存在せず、研究におけるスケール設定は常に合目的的(purposive)である。つまり、スケールの区分設定は固定的ではなく、理解しようとするべき対象、課題設定に応じてスケールの設定レベルを柔軟に変え、研究目的に応じ適切なスケールを使い分けていく必要がある。

3.2. 縄文考古学とスケール概念

縄文時代の考古学では、領域や社会組織の構造を理解しようとするときに、集落、生活領域、広域な交易圏や土器様式圏など縄文人の活動空間に広がり(8)の差を認め、それらの階層性を認識してきた。実践面ではマルチスケールの捉え方をしていたといえる。その一方で、空間・時間・形態のマルチスケールの性質を研究理論に反映させる関心は低かったといえる⁽⁹⁾。スケールのミスマッチが議論の発展を妨げていることが指摘されたことはほとんどないが、例えば、それが縄文時代の社会階層をめぐる議論が噛み合わない一因でもある。

人間活動や社会現象には異なる複数の空間と時間のスケールが常に関係するため、スケールを変えると対象(祭祀景観)の異なる特徴や意味がみえてく

る。一ヶ所の墓地を例にとれば、遺跡(ミクロ)スケールでは、墓群の配置状況や副葬品の分布を捉えることができる。地方社会(メゾ)スケールに視点を置けば、複数の墓地や集落を含む地域・地方社会のなかでの祭祀景観の意味を論じることも可能である。三内丸山遺跡の大形木柱列の構築は地域社会の指導者たちの威信を高める効果もあったという解釈は、青森平野部という地方スケールでの評価の一例である。さらに地球(マクロ)スケールにこの祭祀景観を置いてみると、狩猟採集民および初期農耕民社会における社会の複雑化を示す一例としての理解も可能である⁽¹⁰⁾。スケールの差を意識せずに、墓地単位(ミクロ)の分析と列島規模(マクロ)での解釈を比較しても実りは多くない。今後はスケールを適切に区分し議論を進める必要がある。

3.3. マルチスケール分析の一般的手順

クロス・コンテクスチュアル分析法の基本は「部分」をさまざまなスケールの「全体」(=コンテクスト)のなかで解釈していくことであり、ここにマルチ(多重)スケールの視点が求められることになる。

祭祀の社会的意味およびその多義性を明らかにするためのマルチスケール分析では、特に空間スケールにおいて、多くの場合ミクロ(遺跡)、メゾ(地方)、マクロスケールの3階層のスケールで捉えつつ作業を進めることになる。おおよその手順は、ミクロスケールにおいて祭祀景観およびそのいくつかの構成要素(遺構・遺物)に関して形態スケールの階層構造(型式構造)の設定を行ない、それらの諸構造についてメゾとミクロの各スケールでの様々な社会的状況(コンテクスト)と照らし合わせることにより、複雑な祭祀景観の意味が創出される過程を総合的に理解する、ということになる。

ミクロ(遺跡)スケールでの分析作業は、祭祀遺構・遺物の類型化である。遺構・遺物にみられる形態スケールの階層構造(型式構造)を解明し、型式分布のパターン抽出と、複数の遺跡内分析の結果をもとに祭祀空間の類型化を進める。

メゾ(地域・地方)スケールの研究作業は2つあり、第一に遺跡の地理クラスター(地理的なまとまり)を抽出し、地域社会と仮定できる空間の広がりを捉えることである。遺跡の地理的まとまりは、単

に空間的な近接性を意味するだけでなく、当時の社会組織の何らかの反映であることは間違いない。第二に、地域社会と推測する空間スケールにおける、祭祀遺構・遺物の空間分布と、各クラスターに含まれる生活関連遺構・遺物との比較をもとに、祭祀の社会的意味に関する予備的解釈を行う。なお、分布状況の背景・原因・過程の説明にさいして、分布自体から分布の意味を説明することはできないことを確認しておきたい。分布を説明するためには分布以外の情報が必要である。どのような社会関係や出来事の結果としてその分布が形成されたのかを説明することになる。ある遺構・遺物の分布状況は現象面を捉えたのみであり、「分布圏」という名称が適切である。解釈を経て、文化圏、生活圏、通婚圏、情報圏、部族圏など様々な名称が分布圏に付与され、歴史性のある空間スケールとなる。

マクロスケール分析は、マイクロやメゾの広域的な地域間比較研究である。地域間の広域的な比較検討により、各地域の祭祀景観が有する地域性がより明確になる。また、長期的な時間スケールにおける歴史の変遷過程や画期を理解し、そうしたある程度巨視的な歴史的コンテキストのなかに、マイクロやメゾスケールで捉えることができた諸特徴・パターンを置いて考察することにより、各地域における歴史的特性とともに、共通性、一般性も理解することができる。換言すれば、祭祀の社会的機能・象徴的意味そして歴史的意義をより明確に理解することができる。ただし、マクロスケールの分布図には、異なる空間スケールの分布状況が混在する可能性があり、解釈には注意が必要である。また、メゾとマクロスケールではそれぞれのなかにも複数のスケール区分を設けることができる場合もある。

4. ケーススタディ 御物石器の分布を読む

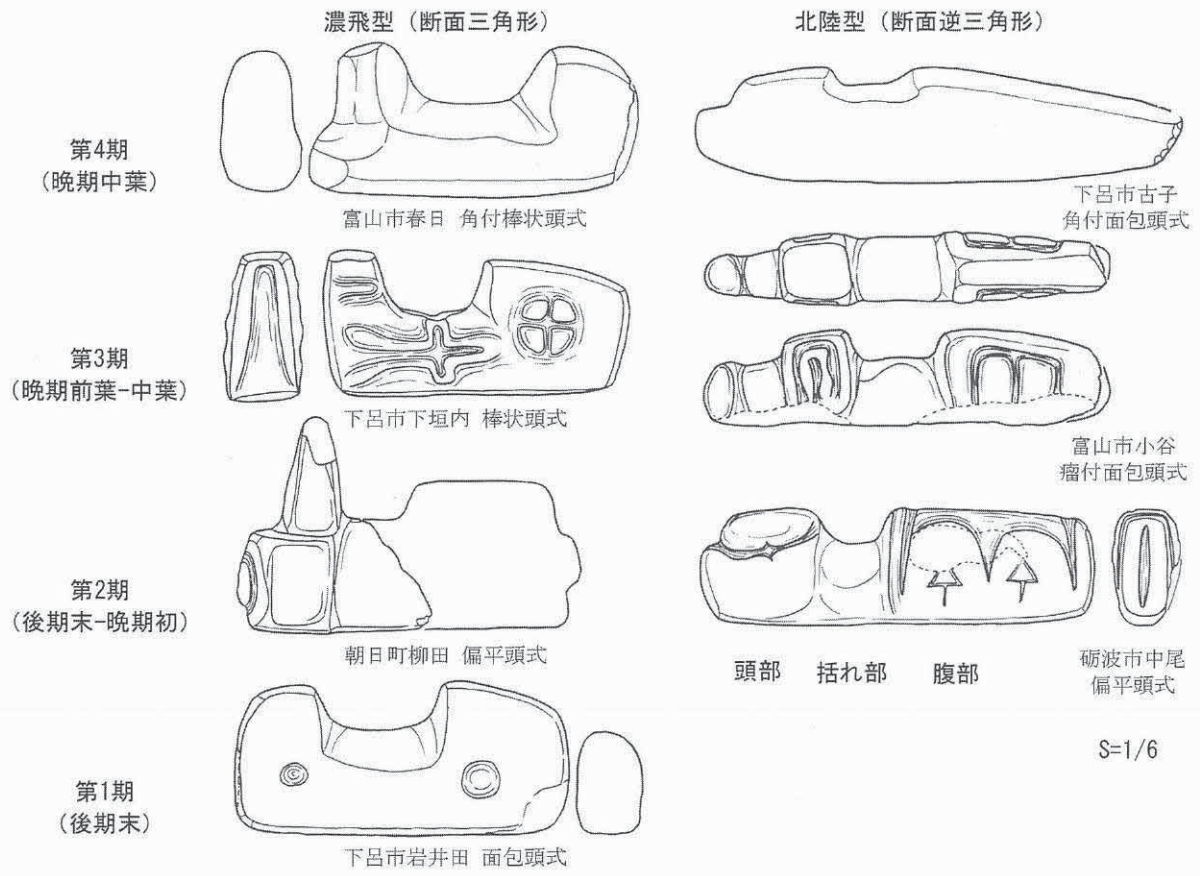
今回は事例分析として空間スケールに関わる分布論研究を扱う。分布論は、地理的分布の特徴を捉え、それらを生成する要因となる社会関係や出来事を考察し、地理的分布の歴史的意義を理解することを目的とする。御物石器の型式（形態スケール）と編年を概観し、メゾスケールの抽出、形態と空間スケールの連動性、メゾスケールを軸にした予備的解釈について述べる。

4. 1. 型式（形態スケール）と編年

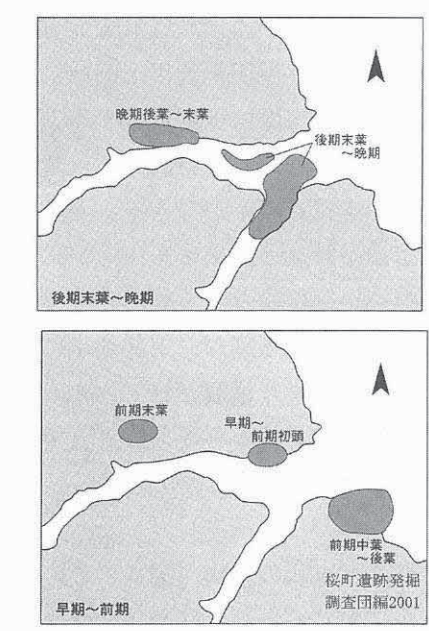
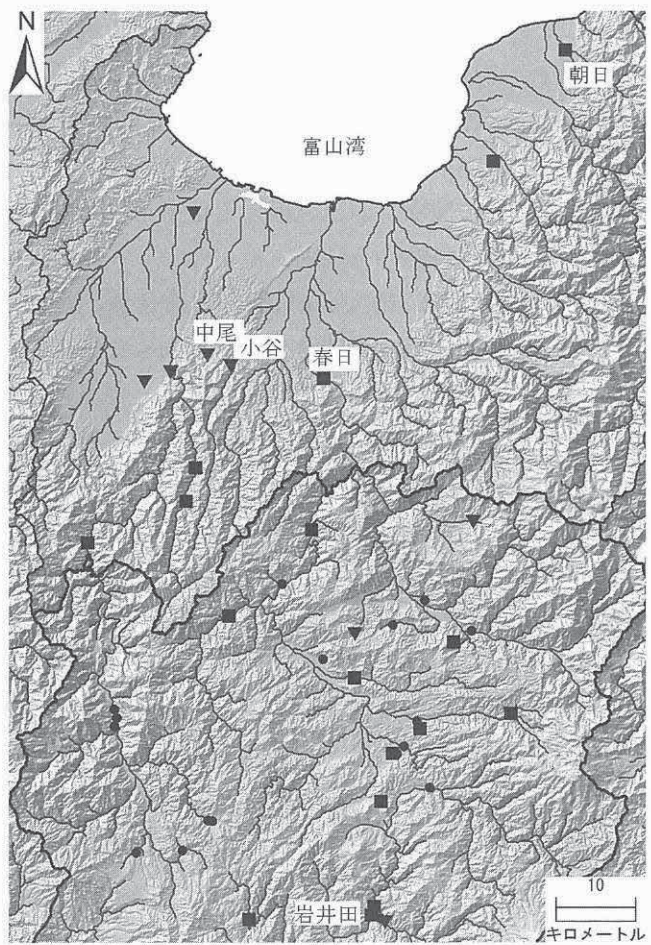
御物石器（ごもつせっき・ぎよぶつせっき）は、縄文時代後期末から晩期中葉にかけて祭祀儀礼用に使われた石製品である（図1）。長さは約20～40センチメートルと縄文時代の石器では大型の部類に入る。中央から少し寄ったところにある鞍状の括れ部をはさみ、一端が横に張り出した方形を呈し（頭部）、もう一端が細長い棒状を呈しており（腹部）、全部で3つの部分から成ることがわかる。側面は、陰刻あるいは浮彫の渦巻形など文様が付くものと無文のものがある。下面はほぼ平らで擦痕が付いているものが多い。自然礫を敲打しておおよその形を作り、磨いて仕上げる。石川県鳳至郡比良村（現穴水町）法永寺境内出土の2点を1877年に皇室に献上し帝室御物となったことからこの名称が付いた。総合的研究には天羽、橋本らの論文がある⁽¹¹⁾。

型式分類（図1） 頭部の断面形で大きく二類に大別され、濃飛型は断面が三角形、北陸型は逆三角形に近い形状を呈する。さらに、頭部の形状で面包頭式、偏平頭式、棒状頭式に分類され、頭部の上端部に瘤付・角付という形態の差がある。これらの属性の組み合わせで細別型式が設定される。

編年と分布 橋本論文に従えば、大きく4期の変遷を経る。第1期（縄文後期後葉）は御物石器の出現期であり、濃飛型面包頭式の分布は飛騨地方南部に限定される。第2期（後期末から晩期初頭）は八日市新保式期を中心とする時期。濃飛型（瘤付）偏平頭式が主流で、飛騨地方全域で製作・使用が活発化する。この時期の終末に北陸型偏平頭式が成立すると考えられる。第3期（晩期前葉から中葉）は土器編年では御経塚式から中屋式期に相当する。御物石器は北陸地方に波及し、北陸型を生み出す。飛騨や美濃地方には濃飛型棒状頭式が、富山・石川を中心とする北陸地方には北陸型瘤付面包頭式が分布し、二系統が併存する。また、飛騨地方は北陸型を逆輸入する現象も見られる。最も広域に分布する時期でもあり、東は新潟県から西は鳥取・岡山県にまで、少数ではあるが分布するようになる。第4期（晩期中葉）は土器編年では下野式に相当する時期で、濃飛型角付棒状頭式と北陸型角付面包頭式がある。



第1図 富山県域と飛騨地方の御物石器 (橋本1976をもとに作成)



第3図 桜町遺跡における低地への進出

第2図 富山県域と飛騨地方の御物石器の分布

■濃飛型、▼北陸型、●型式不明、
遺跡名は橋本1976に準拠

4.2. 形態スケールと空間スケールの連動性(図2)

ここでは、形態スケールの違いによる空間スケールの変異を取り上げる。空間スケールは岐阜県飛騨地方から富山県にかけての地域とする。地形的には黒部平野から砺波平野までを含む広義の富山平野とその南に広がる飛騨山地を含み、そのなかを神通川や庄川はじめ多くの河川が北流し富山湾へ注ぐ。時間スケールは縄文時代後期末から晩期中葉までの500~600年程度である。

御物石器分布圏1は、形態スケールは全体の形状、形式(フォーム)レベルでの共通性を重視し、「御物石器」として一括できる石製品としての分布を見る。その場合、空間分布スケールは飛騨地方と富山県域に広く分布する様相を看取できる。富山湾沿岸部での分布がやや希薄といえようか。

御物石器分布圏2では、形態スケールはより細部の形態差を重視し、濃飛型(断面が三角形)と北陸型(断面が逆三角形)というタイプレベルの違いによる空間分布の状態を観察する。各型式の分布は、分布圏1よりもミクロな地域的偏りを示している。明確な線引きはできないものの、北陸型は富山県西部地域にまとまりを有し、濃飛型は飛騨地方に多い傾向が指摘できる。北陸型が神通川上流域にも分布するため、両型式の分布圏は一部重複することになるが、分布圏1では単一だった空間スケールが大きく二分される様相を見ることができる。さらに、空間スケールを富山平野部と隣接する山地部に限定すれば、富山平野中央部に横たわる呉羽丘陵を境にして富山県西部地域には北陸型が、東部地域には濃飛型が多いという傾向がより強調されてみえる。

このように、形態スケールを変えることで、異なる空間スケールを導きだすことができる。

4.3. メゾ空間スケールの抽出(図4・5)

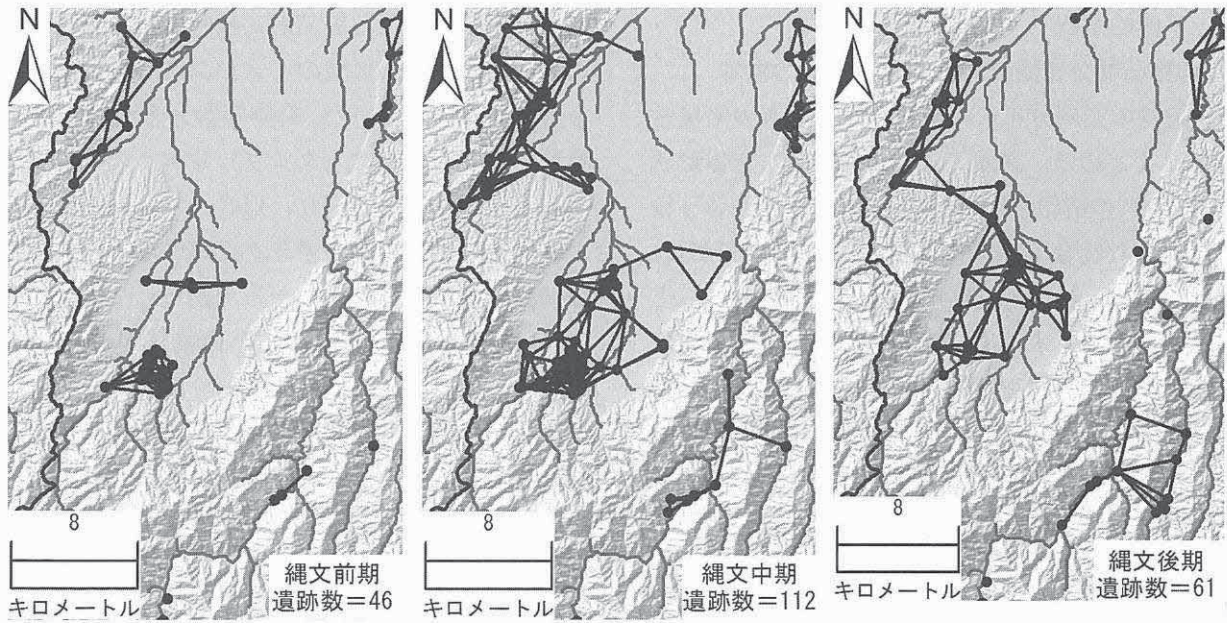
空間スケールにおけるミクロは遺跡、マクロは地方あるいはそれ以上(列島など)となるだろう。では、メゾスケールはどの程度の空間範囲を設定すべきか。その参考となる分析手法としてドロネ三角網による地理クラスター抽出がある⁽¹²⁾。

今回の分析対象地域は富山県西南部である。砺波平野南半部とその南側に隣接する山地部分を含み、庄川中流域、小矢部川上流域にほぼ相当する。砺波

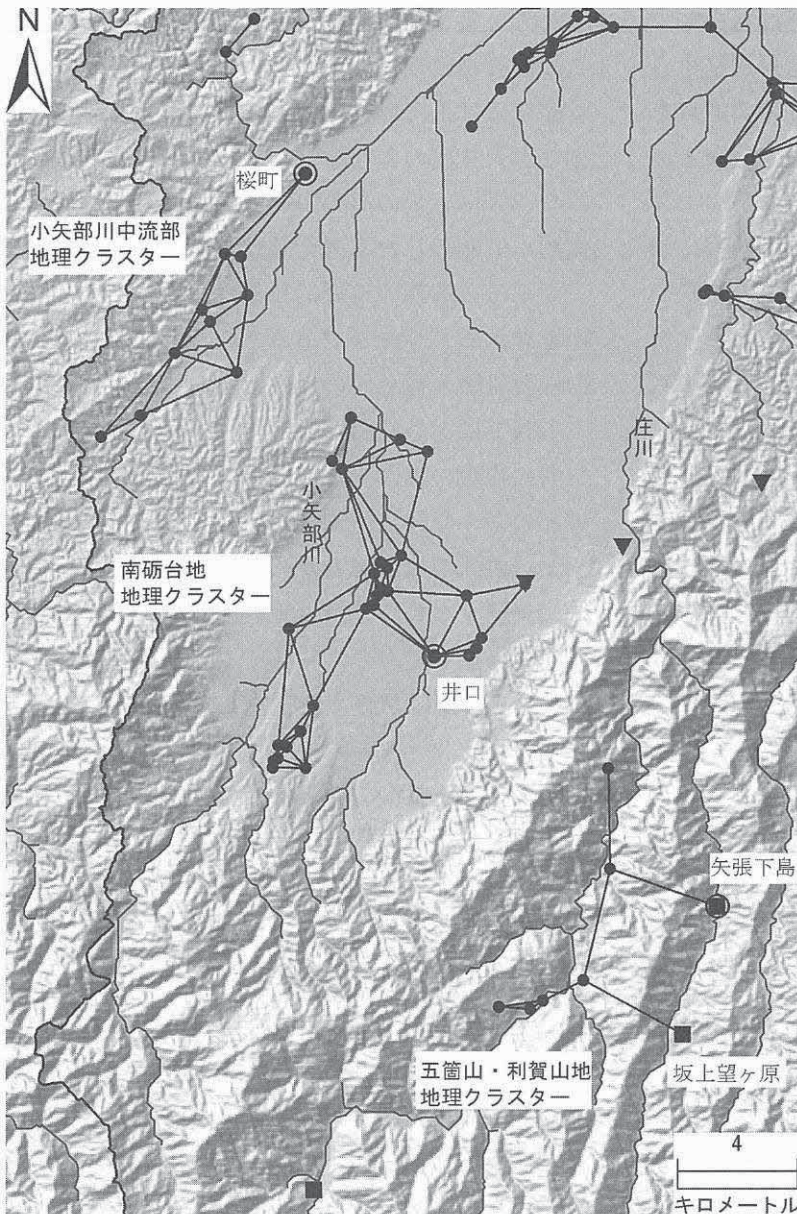
平野南東縁部と隣接する山地では御物石器が比較的多く出土している。対象時期は縄文前期(7000~5500年前)・中期(5500~4400年前)・後期(4400~3200年前)・晩期(3200~2400年前)で、後期末~晩期中葉までが御物石器が盛んに製作使用されていた時期である。時代別の遺跡数は縄文前期46ヶ所、中期112ヶ所、後期61ヶ所、晩期49ヶ所となる。遺跡は分布調査等も含めて縄文時代前期から晩期のいずれかに該当する可能性のある遺跡を対象とした。これは、人々の活動範囲を知るためには何らかの人間活動の痕跡が確認できた場所をできる限り網羅することが望ましいためである。遺跡データは総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化:景観の形成史」で作成したデータの一部を利用し、GISアプリケーションはESRI ArcGIS 9.3およびSpatial Analyst、3D Analystを使用した⁽¹³⁾。

多くの場合、遺跡の分布は一様ではない。遺跡分布の偏り(地理的なまとまり)を識別する手段としては、区画法やカーネル密度推定法などいくつかあるが、ここでは遺跡間の距離を基礎としてグルーピングする手法を採用する。ドロネ三角網を用いた地理クラスター抽出をもとに、遺跡の地理的凝集を分析する方法である。遺跡間の距離(平面距離)を算出し、ドロネ三角網により4000メートル以下(ほぼ徒歩1時間圏)の結合線分を抽出し、地理的なまとまり(凝集性)を識別する。

分析の結果、縄文前期4個、中期3個、後期2個の地理クラスターを抽出できた。大きな特徴は、縄文前期から晩期まで、地理クラスターが存在する範囲は大きく変わらないことである。多少の伸縮はあるが、五箇山・利賀山地、南砺台地(砺波平野の南奥部)、小矢部川上流左岸部の3個の地理クラスターが地域的なまとまりの基本となり、持続性(あるいは反復性)が見られる。また、富山平野では後期・晩期に低地に立地する遺跡の増加が指摘されているが、砺波平野南奥部を中心とするこの地域では、図4のような空間スケールでは低地への顕著な移動は観察できない。ただし、図3の桜町遺跡のように、微地形のスケールで捉えられる事例は、よりミクロなスケールでの立地分析の必要性を示唆している⁽¹⁴⁾。



第4図 富山県南西部における縄文時代の遺跡分布と立地の変化



4000m以下の線分で結合するドローネ三角網

おおよそ徒歩1時間圏内にある最も自然な隣接点（遺跡）をつなぐネットワーク。ドローネ三角網（三角形分割）は、ポロノイ領域が接する各点を繋いでできる三角形の集合体であり、領域が隣接する遺跡を結んだ線ともいえる。この分析により関係性の高い遺跡の空間的まとまり（偏在）を抽出できる可能性がある。

- 晩期（遺跡数=49）
- ◎ 環状木柱列
- 御物石器（濃飛型）
- ▼ 御物石器（北陸型）

第5図 縄文晩期の遺跡分布と地理クラスター

4. 4. 予備的解釈

(1) 御物石器分布圏の異なるスケールの意味

祭祀遺物の空間分布にみられるスケールの階層性についてまとめる。御物石器分布圏1は、全体形状(フォーム)の情報を共有し継承していくという役割を果たした社会関係のスケール(空間的広がり)を示している。神通川・庄川両河川の下流域から上流域までをカバーする規模である。なお、御物石器の成立に魚形の石製品(異形石棒)が関連している可能性があるとするれば、御物石器のフォームが魚類に関するシンボリズムの表現であり、特定の抽象的観念が共有されていたことを示すかもしれない。

御物石器分布圏2は、分布圏1で共有されていたイメージの実体化過程において、具体的な形態属性を共有する社会関係のスケール(空間的広がり)を示している。最も端的に表れている属性は断面形であり、濃飛型は三角形、北陸型は逆三角形を呈する。分布圏1よりも具体的で細かな形態属性に共通点を持つことから、分布圏1より関係性の強い集団といえ、その空間スケールは1よりも小さい。

一般的に、石製品の分布圏が形成される過程には二つのケースを想定できる。第一は、特定の場所で製作された製品が実際に流通したケースであり、第二は、情報が流通し共有され、それぞれの場所で石材に実体化されるケースである。御物石器は実物が流通した場合も想定しうるが、第二の場合が比較的多いと推測される。石川県御経塚遺跡や同真脇遺跡の事例では、遺跡から近距離で入手可能な現地性石材を利用している場合が多い⁽¹⁵⁾。

御物石器分布圏をモノと情報の流通圏とみなし、石製品の实物や形態情報がある空間スケール内で交換・共有されていたとすれば、そこには何らかの人的交流が存在したと考えてよい。換言すれば、これらの分布は祭祀情報ネットワークの存在とその広がりを示している。そうならば、御物石器の実体化に際して、少なくとも二つ以上の空間スケールの異なる情報・物流圏(とそれを取り持つ社会関係)が関与していたと理解できよう。御物石器分布圏1は、形式(フォーム)のイメージの拡散と共有に関わるネットワークであり、今回設定した空間スケールである飛騨・富山県地方を合わせた地域全体に広がっている。御物石器として括ることができるほど全体

の形状が類似した石製品が比較的濃密に分布する地理的空間であり、形式のイメージはこの分布圏1のなかで共有されていた。御物石器分布圏2は、北陸型、濃飛型のような型式(タイプ)レベルの形態を共有するネットワークであり、形式(フォーム)レベルよりも狭い地域でまとまりを形成する。分布圏1とは別種の社会関係の関与だろうか。

(2) 遺跡の地理クラスターと地域(地縁)社会

遺跡の地理クラスターの意味を考えるためには各クラスターに含まれている遺跡の種別を整理するのも有効な方法であろう。晩期の各クラスターは、いずれも複数の集落を含んでいる。五箇山・利賀山地では矢張下島、南砺台地では井口、小矢部川上流部では桜町などが代表的である。また、祭祀遺構も含まれており、環状木柱列が、矢張下島、桜町で発見されている。井口遺跡の事例も該当するであろう。この構築物は6~10本の太いクリの木を縦割りにした柱をほぼ正円形に配置し、一ヶ所に2本の柱を並べた出入り口のような部分を設ける。規模は外径で約4~8メートルのものが多く、縄文晩期中葉(中屋式期)に盛行したと考えられ、御物石器の最盛期に一致する。遺跡の地理的凝集は、単に空間的な近接性を有するグループであるというだけでなく、当時の社会組織の何らかの反映であることは間違いない。

それでは、さしわたしが約10~13キロメートルの空間に複数の集落や祭祀遺構を含む地理クラスターはどのような社会組織に対応する可能性があるだろうか。現状では、何らかの社会的交渉関係を有する住民集団すなわち地域(地縁)社会の可能性あることを指摘しておきたい。千葉の定義によれば、地域社会とはある広がり共有し、類似した生活形態をもち、それぞれの程度で連帯感を抱いている住民集団をさす。社会結合としては極めて緩やかで、面積空間的な枠ではなく、社会的交渉の実態に即した関係空間である。その範囲は地図上で明確に一線を引くことは難しく、結合の濃淡として表現されている⁽¹⁶⁾。また、この空間スケールが生活上の必要から自発的に形成された可能性があれば、千葉のいう実質的地域社会(地縁社会)に該当する可能性もあろう。これは谷口のいう地縁組織に近い。これは複数の地域社会が結び付いたより大きな地域集団であり、統合原理や規模はさまざまに一定の概念

で規定することは難しいとされる⁽¹⁷⁾。ともかく、縄文晩期にこの地域に暮らした人間が日常的に動き回り経験する空間あるいは社会のスケールである可能性を指摘しておきたい。もちろんこれは一つの仮説にすぎない。まとまりを区切る数値である閾値を4キロメートルとしたことの妥当性やすべての遺跡が同時期ではないことを考えれば、提示した地理クラスターは暫定的な結果である。それでも、現状のデータセットでどれだけ理解が可能かを試し、その結果を評価して再度分析を進める、という手順は必要である。

5. まとめと今後の展望

クロス・コンテクスチュアル分析法の理論的基盤は「部分（祭祀）の意味は全体（地域文化の総体）の中で理解されるべきであり、全体の意味を理解するには各部分の詳細を知る必要がある」という仮説であり、人類学的モデル、エージェント論、解釈学にその基礎を置く。

この分析法の大きな特色は、空間・時間・形態にスケール概念を導入し多重（マルチ）スケール分析を行う研究手法である。異なる3つの空間スケール（ミクロ、メゾ、マクロ）を区別し、それらを重ね合わせながら祭祀の社会的・歴史的意味を考察する。さらに、それらの比較検討を通じて祭祀の多義性を読み取るとともに、祭祀の個性（歴史性）と一般性を明らかにし、ある縄文祭祀に対する総合的理解を提示する。分析手法については今後の検討を要する部分が多いものの、本論ではスケール概念の導入を通じて、祭祀遺物の空間情報（分布状況）を祭祀遺物の分析に活用するケーススタディを提示することができた。また、精神文化に関わる研究においても地理情報システム（GIS）による空間分析が活用できることも明らかにできた。

最後に、長期的な展望として、マルチ・エージェント・モデルによるシミュレーション分析の可能性を指摘しておきたい。複数のエージェント（マルチエージェント）に異なる行動原理を設定し、仮想的な社会のなかで各エージェントの相互作用と擬似的に復元した祭祀システムがどのような振る舞いを示すのかをシミュレーションするのである。シミュレーション研究の利点は、仮定条件（コンテクスト）

の祭祀への「効き方」を実験・予測できる点にある。その実現には多くの困難が伴うが、挑戦すべき課題として興味深い。いずれにせよ、今後の祭祀考古学研究には、統計分析や今回示したGISを用いた空間分析やなど計量的分析の一層の活用が望まれる。

[付記] 本稿は総合地球環境学研究所「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」プロジェクトの成果の一部を含んでいる。また、本稿の執筆にあたり、稲畑航平、加藤元康、瀬口眞司、鈴木忠司、松森智彦から多くの御教示を賜った。厚く御礼申し上げる。

注

- (1) 中村大 2008a 「景観考古学の方法論に関する検討と北日本の縄文時代の祭祀的景観」『北海道とその周辺地域の新石器化・現代化 地球研・北海道班・2007年度報告書』NEOMAP、中村大2008b 「社会階層」『縄文時代の考古学10人と社会』同成社、中村大2009 「祭祀考古学研究と解釈：コンテクストとスケール」『國學院大學伝統文化リサーチセンター「祭祀に見るモノと心」平成21年度フォーラム 環状列石をめぐるマツリと景観 発表資料集』。
- (2) 谷口康浩 2009 「縄文時代の生活空間—「集落論」から「景観の考古学」へ」『縄文時代の考古学8生活空間』同成社。
- (3) Moore, S. F. and Myerhoff, B. G. 1981, *The Secular Ritual*. 梶原景昭1987 「儀礼」『文化人類学事典』弘文堂。
- (4) 内堀基光 2007 「序—資源をめぐる問題群の構成」内堀基光編『資源と人間 資源人類学01』弘文堂。
- (5) Shanks, M. and Tilley, C. 1987, *Social Theory and Archaeology*. Cambridge, Polity Press.
- (6) 中村大 2008c 「文様単位数とその意味」『総覧縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション、Dobres, M and Robb, J 2000 *Agency in Archaeology*. Routledge (London)。
- (7) T.A.シュワント (伊藤勇・徳川直人・内田健監訳) 2009 『質的研究用語事典』北大路書房
- (8) 高橋伸夫 1988 「スケールの意義」中村和郎・高橋伸夫編『地理学講座第1巻 地理学への招待』古今書院。加賀美雅弘 2007 「地域・空間論」上野和彦・椿真智子・中村康子編『地理学基礎シリーズ1 地理学概論』朝倉書店。Helen, M. P., Schiffer, M. B., and Reid, J. J. 2008. *Landscape Formation Processes*. In B. David and J. Thomas (eds.) *Handbook of Landscape Archaeology*.
- (9) 代表的な論考として以下がある。向坂鋼二 1970 「原始時代郷土の生活圏」『郷土史研究講座1』朝倉書店。林謙作 1974 「縄文期の集団領域 仙台湾沿岸を中心とした予察」『考古学研究』20(4)、小林達雄

- 1984 「縄文時代領域論」『坂本太郎博士寿記念日本史学論集 上巻』吉川弘文館、後藤和民 1985 「馬蹄形貝塚の再吟味－東京湾沿岸における縄文集落の一樣相について－」『論集日本原史』吉川弘文館、佐原真 1985 「分布論」『岩波講座日本考古学1 研究の方法』岩波書店、谷口康浩 2005 「第三部 生態論」『環状集落と縄文社会構造』学生社。
- (10) 小林達雄 1993 「中部縄文文化の展開」小林達雄・原秀三郎編『新版 古代の日本 第7巻 中部』角川書店、岡本孝之 1993 「攻める弥生、退く縄文」小林達雄・原秀三郎編『新版 古代の日本 第7巻 中部』角川書店。高橋龍三郎 2001 「総論：村落と社会の考古学」『現代の考古学6 村落と社会の考古学』朝倉書店頁。中村大 2008 「社会階層」『縄文時代の考古学10 人と社会』同成社。
- (11) 天羽利夫 1966 「御物石器の研究」『考古学雑誌』第52巻第1号、橋本正 1976 「御物石器論」『大境』第6号。
- (12) 小沢一雅 1994 「考古学データベースに基づく地理クラスター抽出」『情報処理学会論文誌』Vol.35 No.7、松森智彦 2009 「富山県遺跡分布における地理クラスター抽出」中井精一編『平成18～20年度科学研究費(基盤研究(B)(1))日本海沿岸社会の地域特性と言語に関する類型論的研究 研究課題番号18320065 日本海沿岸社会とことば』。
- (13) データ入力には松森智彦、稲畑航平、奥村香子の協力を得た。
- (14) 桜町遺跡発掘調査団編 2001 『桜町遺跡 調査概報』学生社
- (15) 能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 2006 『真脇遺跡2006 史跡真脇遺跡整備事業に係る第7次～9次発掘調査概報』能登町
- (16) 千葉徳爾 1994 「地域社会」『縮刷版 日本民俗事典』弘文堂、福田アジオ 1994 「地縁」『縮刷版 日本民俗事典』弘文堂。
- (17) 谷口(注2文献)